

Muse

帝国データバンク史料館だより[ミュージズ]

TDB Historical Museum

2012.7
VOL.19

巻頭特集

乗り越える老舗

その時—。決断と行動から見えてくる事業継続力。

《特別企画》特別講演会

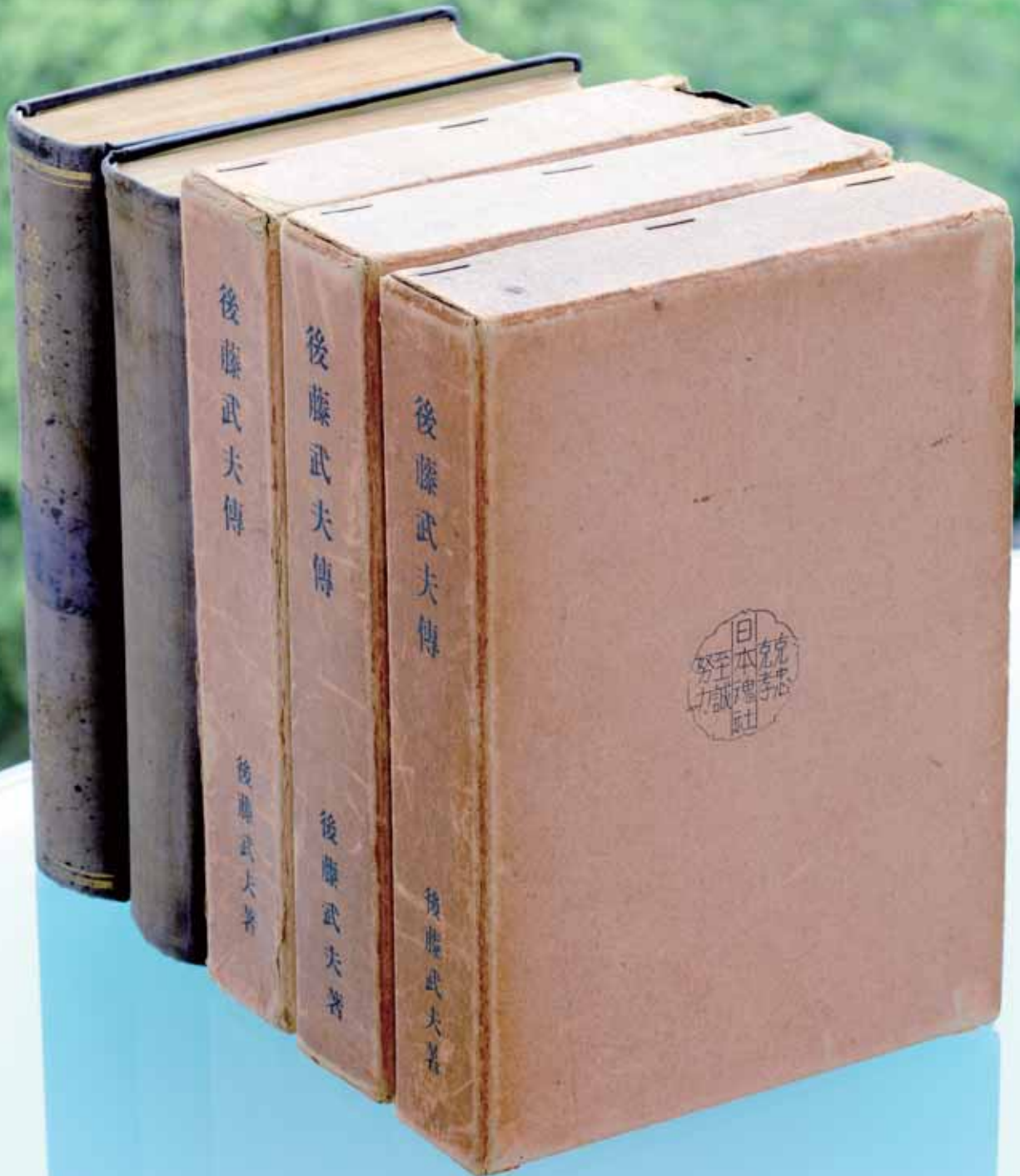
史料を見る、読む、識る

～“くずし字が語る”社会・生活・風俗～

東京都公文書館 専門官 中元幸二氏

学芸員ファイル FILE No.008

企業信用調査の心を今に伝える 後藤武夫伝



乗り越える老舗

その時——。決断と行動から見えてくる事業継続力。

帝国データバンクが2012年2月に行った調査によると、東日本大震災の「被害甚大地域」(岩手・宮城・福島3県沿岸部の「津波被害が特に大きかった地域」と「原発事故による警戒区域・計画的避難区域」)に本社を置く企業の中で、「事業再開」が確認できた企業は全体の7割にのぼる。2011年7月に同調査を行った時点では5割にとどまっております。着実に復興に向かっていく企業が増えていることがわかる。

当館ではこれまで老舗について展示や発表を行ってきたが、それら老舗も幾多の困難を克服して企業存続の危機を乗り越えて今がある。今回、伊勢湾台風と東日本大震災を経験した老舗取材した。

1 伊勢湾台風で見せた老舗の底力

1959(昭和34)年9月21日にマリアナ東にあった弱い熱帯低気圧は22日に台風15号となり、日本列島を直撃。26日午後9時には名古屋気象台観測で瞬間最大風速45・7メートルを記録した。室戸台風(34年)、枕崎台風(45年)に次ぐ超大型の台風であった。愛知・三重の両県は大きな被害を受け、なかでも名古屋市南部や愛知県の海部郡一帯、三重県北部の木曾三川河口部付近の被害は甚大だった。

愛知県刈谷市に本社を置く角文株式会社は鈴木文三郎4代目社長に話を伺った。



徹底した地元密着型で「地の縁」を守って150年

伊勢湾台風が転機になった角文

角文株式会社は、1863(文久3)年に三河国碧海郡泉田村(現愛知

刈谷市)で鈴木文助が製材と材木卸商として創業、来年で創業150年を迎える。創業以

▶大正から昭和にかけて行われていた工事の様子(写真提供:角文株式会社)刈谷市を流れる逢妻川はたびたび決壊し、堤防の復旧・改修を角文が行っていた。

来今日まで、明治維新という大変革を始め、日清日露戦争、第一次世界大戦、日中戦争、第二次世界大戦など、激動の時代を経て、歴史を築き上げてきた。「創業したのはちょうど幕末で、創業

4年で明治維新を迎えています。国の仕組みが大きく変わったこの時、角文にも大きな変化が当然あったと考えられますが、記録には残っていません。ただ、明治になって学校が出来始めたことから、その学校建築をやらせていただいたという事は聞いています」

泉田村は、当時の物流の要である川と港に囲まれ、木曾に近いことから製材業が盛んだった。角文は明治維新によつて教育制度が整備されるのに合わせて、建築請負も手がけるようになる。これが現在の角文の礎となった。時代を見つめながら企業の形を変えていくという考え方は、こののち角文のDNAとして受け継がれていく。

「初代が先進的だなと思うのは、自分の息子に高等教育を受けさせたことです。慶応義塾で福沢諭吉に師事したのですが、地方の商売屋の息子にそこまで高等教育を受けさせるのは稀だったと思います」

2代目の三郎は50年間にわたって経営に携わり、この時期に角文は大きく発展した。

3代目の養子、孝平に経営がまかされて6年目、順風満帆に見えた角文に試練が訪れる。伊勢湾台風である。刈谷市も建物の全半壊は2000棟を超え、愛知県から災害救助法の適用地域に指定された。復旧のため刈谷市では応急仮設住宅130戸の建設を決定するも、資材不足、人材不足、さらに安い建築予算ということもあり、これに応じる企業はなかった。

「この地域は海拔が低いので、家屋の倒壊や流出などで相当被害があったと思います。わたしはその時2歳でし

角文株式会社

代表取締役社長
鈴木文三郎氏

本社所在地:愛知県刈谷市
業種:建築業、不動産業
1863(文久3)年創業。初代店主鈴木文助、碧海郡泉田村にて創業。屋号「角屋」。2013年、創業150年を迎える





◀伊勢湾台風で受けた企業の被害を伝える記事(『帝国興信所報』1954年10月21日)名古屋通産局災害対策本部が取りまとめた被害状況と復旧対策を報じている

だが、後年父から聞いた話によると、市内の建設会社は民間の方がいい価格で受けられるというので、そちらへ集中したということでした」

条件の悪さに、どの企業もやりたがらなかった仮設住宅の建設を角文が引き受けたのは、「地の縁」があったからである。

「この辺の材木屋は、台風で木材が流されましたし、どの自治体も仮設住宅の建設は急務でしたから、資材は非常に不足していました。しかも通常の仕入れでは採算が合わない。父は実父が県内の山間部、稲武町で林業をやっていることに着目し、腹巻きの中に現金を入れて稲武まで材木を買い付けにいったそうです。道路網が寸断されて途中でしか行けず、最後は歩いて聞いています。同様に人材についても、宮崎にいた父の兄に要請したところ、100人ほど集めてすぐに現地に応援に入ってくれたそうです。住宅建築工事中は帰宅しても靴を脱がずに横に

なつてまた出かけるなど不眠不休で取り組み、1、2か月で完成しています」

角文はこの復旧事業をやり遂げたことで行政からの信用が高まる。そのおかげで数多くの公共工事を手がけたことが、角文発展の原動力になっていった。4代目の文三郎社長になってからは不動産事業にも力を入れ、日本で初めての「定期借地権付き分譲マンション」を手がけた。

「これも縁で、まだ旧法の借地権の時代に借地権付のマンションを手がけてうまくいきました。その翌年に借地権に関する法律が変わり、前年に旧法で経験していたのでやろう、ということを取り組みました。刈谷市というところは、トヨタグループのさまざまな企業の本社があり、当社もデンソーさんとは先代からの縁で事業が発展してきています。角文が事業を続けてこられたのも、恵まれた地の縁を大切にしているからに他なりません。これから刈谷という地域密着にはこだわり続けます。一方で建設と不動産事業の手法については、時代に合わせどんどん変えていきます」

一般定期借地権付マンションの販売を成功させた文三郎社長は、人口の減少や高齢化社会を見据え、リフォームやリハウスなどのストックビジネス事業

もスタートするなど事業の間口を広げている。

2008(平成20)年、当館が行った「老舗4000社アンケート」でも、回答企業の半数以上が「主力事業の内

2 一東日本大震災にも屈しない老舗

2011年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の地震が発生。国内観測史上最大規模の地震。発生から1年3か月経った現在、死者1万5866人、不明者2946人(2012年6月27日現在)にのぼる。

宮城県沿岸部の石巻市門脇に本社を置く丸平かつおぶし株式会社は4代目社長、阿部真也社長と、同じく宮城県の内陸部、登米市で創業した川内印刷の5代目社長、猪股育夫社長に話を伺った。

顧客、社員、取引先や地元企業との「知の縁」が生んだ再生力

東日本大震災で想いを新たに、丸平かつおぶし

丸平かつおぶし株式会社は、宮城県石巻市門脇の現在の地で、かつお節製

造と仲買を始めた。正確な創業年は判明しないものの、1903(明治36)年の内国博覧会に出品した史料が残されていることから、少なくともこの年には事業を行っていた。

「高知で始まったかつお節の製造は、明治になって全国に広まったようです。この帯もかつお節製造会社がいくつもできたと聞いています」

しかし三陸産のカツオは脂が乗って



株式会社丸平かつおぶし

代表取締役社長
阿部 真也氏

本社所在地:宮城県石巻市
業種:水産食品製造
1903(明治36)年阿部平七が水産物加工業「丸平商店」として創業。1982(昭和57)年に現商号に変更



◀昭和初期の本社1階かつお節工場
(写真提供:株式会社丸平かつおぶし)

いたためにかつお節には向かず、同業他社は次々と蒲鉾製造や水産加工業へと業態を変化させていった。その時、丸平かつおぶしの選択は――。

「先代の時にかつお節の製造をやめ、仕入れたかつお節を削り節にしてうどん・蕎麦店、料理屋向けへの販売を開始しました。当社の歴史で一番大きな変革です」

三陸の海は豊かな恵みをもたらしてくる存在であるが、沿岸部は幾度となく地震や津波の被害に遭っている。特に60(昭和35)年のチリ地震津波後は市場機能も約2km東の魚町に移転した。市場の移転後も創業の地に残った丸平かつおぶしは、業務用かつお節の得意先を東北全県に広げ、「漬け魚」の製造販売も手がけるようになった。創業1000年を機に2008年、東京出店も果たし、事業も順調だった。そして2011年3月11日。

「地震発生後、津波が2階の天井まで来て1階の漬け魚製造設備と2階の事務所は水をかぶり、経営資料も散逸してしまいました。しかし幸運だったのは財務や販売管理などのデータが入っていた記憶媒体が手元に残ったこと。

データを復旧でき、助かりましたね」

門脇地区は被害が甚大だったため、電気や水道などライフラインが復旧したのは、震災から2か月後のことだった。製造ラインが被害を受け、原料の魚を保管するために魚町で借りていた冷凍庫も失った。自社だけでなく、水産加工に携わる会社がほとんど壊滅状態になり、いつ再開できるかわからない状況で強く感じたのは「知の縁」だった。

震災後、やむを得ず閉店した東京の店舗シャッターには、お客様からのメッセージが数多く寄せられた。業務用削り節の得意先は、他社に切り替えができるにもかかわらず、丸平かつおぶしの製造再開を待っていてくれた。「本当にありがたいことでした。それはひとえにお客様と直接つながっていたからで、当社の強みです。先代が確立した業務用削り節の直接取引、私の代で始めた東京の店も直売スタイルですから。また、原料の在庫を失った当社に手を差し伸べてくれたのも長年取引している東京と大阪の間屋でした」

帝国データバンクでは今年2月に東北3県・沿岸部「被害甚大地域」5000社の追跡調査を行っている。それによると、事業再開を確認できた

企業は約7割にあたる3507社にのぼった。

「当社は社屋も残りませんでしたし、社員もみんな残ってくれたので、震災から2か月後の5月に業務を再開することができました。事業を再開する企業も増えていますが、新しい設備と新しい人で再出発をする企業は、これらが本場の意味での復興かも知れません。当社は漬け魚の製造再開に際しても、従業員が要領もレシピもわかっているのでスピードが全然違う。やつぱり最終的には人なんです」

さらに震災をきっかけにした活動が始まり、新しい知の縁も生まれた。東北復興支援プロジェクト「希望の環」である。被災した石巻沿岸の生産者たちが互いに活用できる生産設備を融通しながら共同企画商品の生産を始めた。13社の17商品を詰め合わせた「感謝の詰め合わせセット」がインターネットを通じて販売されている。

「今までは一国一城の主じゃないけど、1社で製造・販売が成り立っていたのが、震災を機に共同で取り組むという動きに変わりました。当社も味噌会社とのコラボレーションが実現し、新商品が生まれています。このつながりは今後も大事にしてい

たいですね」

お客さん、社員、家族、地元の企業。千年に一度という大規模な震災被害に見舞われたが、丸平かつおぶしは石巻で知の縁を活かし、新たな一歩を力強く踏み出した。

「血の縁」を意識しながら企業としての未来と危機管理

東日本大震災からいち早く復旧した川内印刷

廃藩置県実施から数年が経った1874(明治7)年、和紙商だった河内忠次郎がドイツ製の手引活版ハンド印刷機を購入、水沢県の県庁所在地である登米市(現在の宮城県登米市)で印刷業務を開業した。

「ここは裁判所や郡役所があったため、印刷の需要があったそうです。初代の息子が母の生家である猪股家の養子となり、忠次郎の跡を継ぎます。この2代目は大変腕の立つ技術者だったことが、当社に現存する当時の印刷物からもわかります」

この時期、2代目は全国から実習生を受け入れるなど、技術向上に貢献した。3代目猪股才吉は第二次世界大戦という危機を迎える。

「私の父が出征し、男性という働き手がない時代ですから、祖父は女子工員だけで工場を運営していました。幸い父は生きて帰ってきたのですが、その時の流れで今もオペレーターなど現場に女性が多いですね」

前述の「老舗4000社アンケート」によれば、「創業以来のピンチとなった出来事事件は？」の問いに対して「戦争」をあげる企業が最も多く、34.2%にのぼっている。後継者の戦死や店舗・生産設備の消失、原料不足、商品統制が企業活動の存続を危ぶませた要因だった。川内印刷も働き手が不足する中、既成概念にとらわれない女性の雇用という発想で乗り切った。さらに企業経営をしていく上で、組合の存在は大きかった。

「国が打ち出す産業育成の施策を、印刷工業組合が業界の指針として掲げてきました。その指針通りにやってきたことが、生き残ってこれた二因だと思います。組合でさまざまな印刷会社の社長と並ぶと緊張したのですが、そうした緊張状態に身を置くことで経営にカツが入りますし、情報交換もできました。他社が高価な機械を導入した話を聞いて奮起することもありました」

官公庁を主力取引先としていた川

内印刷では、2005年の平成の大合併の際もピンチに陥った。印刷はすべて入札になり、企業間の競争が激化した。苦しい時代が2年半ほど続いたという。それを乗り越えられたのは、顧客に対しての姿勢を変えずに、時代や顧客のニーズに合わせて設備や技術を変えてきたからである。そしてあの日。東日本大震災では、登米市では津波の被害はなかったものの、震度7を記録した栗原市に近く、揺れが激しかったという。「地震が発生した時、私は商工会の会議中でした。地震に備えて事務所や紙倉庫の棚は倒壊防止策を施していたので大きな被害はなかったのです」



◀川内印刷が手がけた輸入向け生糸のラベル(写真提供:川内印刷株式会社)
東北の交通の要衝であった北上川では、明治初期から外国貿易が盛んに行われていた

川内印刷株式会社

代表取締役社長
猪股 育夫氏

本社所在地:宮城県登米市
業種:印刷業
1874(明治7)年創業。宮城県で最も古い印刷会社。1994(平成6)年迫支社を新築。2005(平成17)年8月にISO14001の認証取得



が、大切な印刷機がやられてしまい、1階は全部使えない状態でした。22トンもの機械がずれ、破損したことはショックでしたね。翌日集まった社員たちには、当座の足しにと金庫に入っていた現金を渡しました。今度いつ会えるのか、復旧の見通しも立たず不安で暗い気持ちでしたが、私より早く社員が立ち直ったのです。『いつから仕事をするんですか』『いつ来たらいいですか』と逆にハッパをかけられました」
宮城県下で最も迅速に機械を復旧させた川内印刷だが、そこには同社なりのリスク管理があった。
「印刷機械をすべてハイデルベルク社1社に集中させていたのが良かった。自動車に例えるとメルセデスのような機械で、借金をして導入しましたが、

結果的には長持ちしていますし、震災後すぐにメーカーが修理対応してくれ、10日後には1、2台が動き出ししました。運も良かったですね。ちょうど新年度を控えていたこともあり、顧客からは、すぐに作って欲しいという依頼も来ました。戦争もそうですが、今回の震災でも生き残ってこれたのは、人間力と設備力です」

老舗が抱える課題の一つに、後継者問題がある。川内印刷では現在6代目が他の印刷会社で修行中だという。育夫社長は創業家が経営を引き継いでいくことについて、緊張感が必要だと述べている。企業の新陳代謝を促すためにも早めに自ら退任することを意識しなければ、と言う。

「先代の社長である父からはいいことも悪いことも学びました。例えば父が真剣に取り組んでいた組合活動は、わたしも受け継いでいます。反面、従業員の働く環境に無頓着だった父を見て、私は労働環境の整備に力を入れました。経営者が世襲するということは、一歩間違えると危険なんです。つないでいくために心しなければならぬ」
脈々と引き継がれていく血の縁を大切にしながら、県内最古の印刷会社はまた一つ危機を乗り越える。



写真①



歌川豊国「風流てらこ吉書はじめけいの図」公文教育研究会 所蔵

《特別企画》特別講演会

史料を見る、読む、識る

～“くずし字が語る”社会・生活・風俗～

主催：帝国データバンク史料館
協力：新宿歴史博物館・企業史料協議会

東京都公文書館 専門官 中元 幸二氏

91年、立正大学大学院文学研究科史学専攻修士課程修了。90年4月より東京都公文書館に勤務し、現在に至る。くずし字に関しては、企業史料協議会を始めとした多くの講座で講師を務め、解説にとどまらずその歴史的背景まで触れる内容が評判を呼んでいる



本講演会は、当館が2012年4月24日～6月29日に実施したテーマ展示「読む、書く、伝える くずし字に見る近代日本の夜明け」の開催を記念して2012年6月21日に行われたものである。

講師は、同展開催にご協力いただいた東京都公文書館の中元幸二氏。展示で取り上げた史料や江戸時代の浮世絵、福沢諭吉の「以書付申上候」（『学問のすゝめ』偽版の横行に対する訴え）などを読み解いていくという形でご紹介いただいた講演を再編集したものである。

浮世絵の

くずし字に見る遊び心

最初に2つの浮世絵（写真①、②）をよく見比べていただきます。すぐに両者の関係が全体と部分であることに気が付かれるでしょう。浮世絵にはこのように一枚でも楽しめる構図のもの

と、何枚かを連続させて一枚の続き絵になるように画面に工夫が凝らされているものがあります。この両者の場合も一枚で完結する部分図と続き絵として大画面になる全体図の関係にあります。よく見ると色合いなども違い、別の刷であることがわかります。

さて画面には子どもたちがお習字などの手習いをしている寺子屋の風景が画かれています。部分図（写真①）の方には上部に短冊状のものが幾つも横並びに列なっていますが、一番右に「風流」という文字が書かれています。続けて「てら」「こ吉」「書は」「じめ」「けい」「の図」とあります。バラバラ

に読むと意味がとれずわかりにくいのですが、続けて読みますと「風流てらこ吉書はじめけいの図」となり、この浮世絵の表題であることがわかります。

「の図」の左には「画工」とあり、順に読むと、「よふ」「さゐ」「うた」「かわ」とよ「く」と書かれています。続けられ「画工よふさゐうたかわとよくに」（陽斎歌川豊国）となり、この浮世絵を画いた作者を示していることがわかります。ではそもそも何故このように表題と作者名を平仮名を多用して分解した書き方をしたのでしようか。それはこの短冊のような札状のものは、寺子屋に通う生徒たちの出欠者の名札であり、それに見立てた表現をしたからです。よく見ると「けい」「うた」とよ「こ吉」など、子ども名前のように見せています。ほかにも同じような遊びが見られます。この浮世絵（写真①）で一番左上の女性は帳面を右手で持ち上げています。帳

面の裏側には「西村はん」と書いてあります。これは版元の名前なのです。帳面の裏表紙には持ち主の名前を書きますが、それを見立てて版元の名前を表現しているのです。

ところで「吉書はじめ」というのは正月の行事で、今の「書き初め」にあたります。机を並べて、硯と筆を置き、手を添えて教えるなど、現代と変わらぬ習字の風景が見られます。また、正月だからでしょうか、女性の服装も華美になっています。手習いと関係が深いのは、正月だけではありません。七夕もその一つです。手習いははじめ、裁縫や琴など様々な諸芸の上達を短冊に書いて願うお祭りなのです。手習いで習った漢字や歌を短冊に書くこともありました。子どもたちにとっては手習いが上手くなるように願う行事でもあったのです。

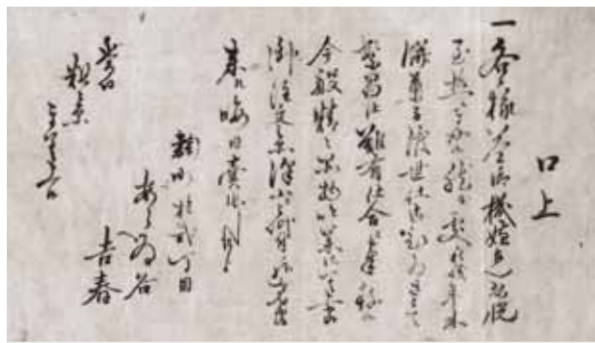
暮らしに溶け込んでいた

くずし字は、引き札にも

次は展示に使用している史料を見ていきます（写真③）。この史料には年月日が書かれていませんが、明治初年に作られたと思われます。これはある和菓子屋がつくった引き札、つまり今でいう売り出しの宣伝チラシにあたる

写真③

「荒井谷 売り出し 口上」新宿歴史博物館 所蔵



口上

一 各々様益御機嫌克恐悦
 至極ニ奉存候、然ル処私儀年来
 餅菓子渡世仕御ひるきニ
 繁昌仕難有仕合ニ奉存候
 今般精々品物吟味仕差上申候
 御注文之品沢山ニ被仰付候様奉希候
 来ル晦日売出し仕候

麹町拾貳丁目
 あらあ谷
 吉春

当日
 粗景
 奉差上候

写真②



歌川豊国「風流てらこ吉書はじめけいこの図」公文教育研究会 所蔵

ものです。和菓子屋さんは今の四ツ谷駅の交差点を少し新宿寄りに行ったあたりに所在していました。

ではこの引き札を書式から見に行きます。1行目には表題として「口上」とあります。本文には最初に時候の挨拶があり、その後内容が書かれます。年月日の記載はなく、「麹町拾貳丁目」とお店の屋号である「あらあ谷」、その隣に「吉春」と名前が書いてあります。通常の手紙であれば宛先の場所に書かれているのは、1行目が「當日」、次の行が「粗景」。粗景とは粗品の景品のことです。最後の行はちょっと読みにくいのですが、これで「奉差上候」(さしあげたてまつりそろう)と読みます。

引き札は、麹町12丁目に店を構える「あらあ谷」という和菓子屋が、今回また売り出しをしますので、皆さんご注文をたくさんくださいます。ご来店のお客様には粗品を差し上げます、と宣伝しているチラシになります。チラシであるからには大量に生産されなければいけません。しかしこれをいちいち書いていたのでは労力が掛かります。字面をよく見

ると毛筆に特有な墨のかすれている様子が見えませんが、これは木版で印刷されたことがわかります。年月日が入っていないのはそういう理由で、いつでも使えるようにしてあるためなのです。売り出しをする時に年月日を入れたい話で、場合によってはなくてもいいからなのです。この引き札の板木は新宿歴史博物館で見ることができます。

この引き札は明治初年のものですが、文字としてはこのようにくずし字が使われています。明治になったからといって読み手や書き手が変化するわけではありませんし、それまでと同じ普通のくずし字で生活していたので、そう簡単になくならないものでした。

くずし字の特徴と読み方

くずし字の特徴は、今と違って旧仮名遣いであること、文字の形態が変体仮名であるなど今私たちが使っている平仮名と形が異なる文字が使われることです。そのため現代の私たちが、くずし字を読むことを困難に感じますが、さらに難しいのは、同じ熟語や文字でも漢字で書かれていたかと思うと平仮名で書かれたり、漢字と平仮名を混ぜて使われることなどです。

当時の子どもたちは、例えば「あ」だったらいくつものくずし方の平仮名と漢字、それからさらにくずされた字体の文字などを習っていました。そのためイロハ47文字といっても、その元になる漢字やくずし方を加えると現在の50音よりも多くの字形や字体の平仮名を学ぶこととなります。それらを読み書きできるようにするのが手習いなのです。

同じ文字を平仮名と漢字の両方に通用させて読み書きしていたことは、今の私たちがくずし字を解読する際には難しいことですが、当時の人にとっ

てはごく普通のことでした。今は、くずし字を読むための専門の辞書としていろいろな辞書があります。漢和辞典などと同じように「^{へんく}や旁で引けるもの、字形から検索するものもあり、かつて寺子屋で一から教えてもらっていたようなことを、今、私たちは辞書を使ってある意味それをなぞるようにしてくずし字を解読しているのです。

大分駆け足でやってみました。この辺で終わらせていただきたいと思いますが、どうもありがとうございました。

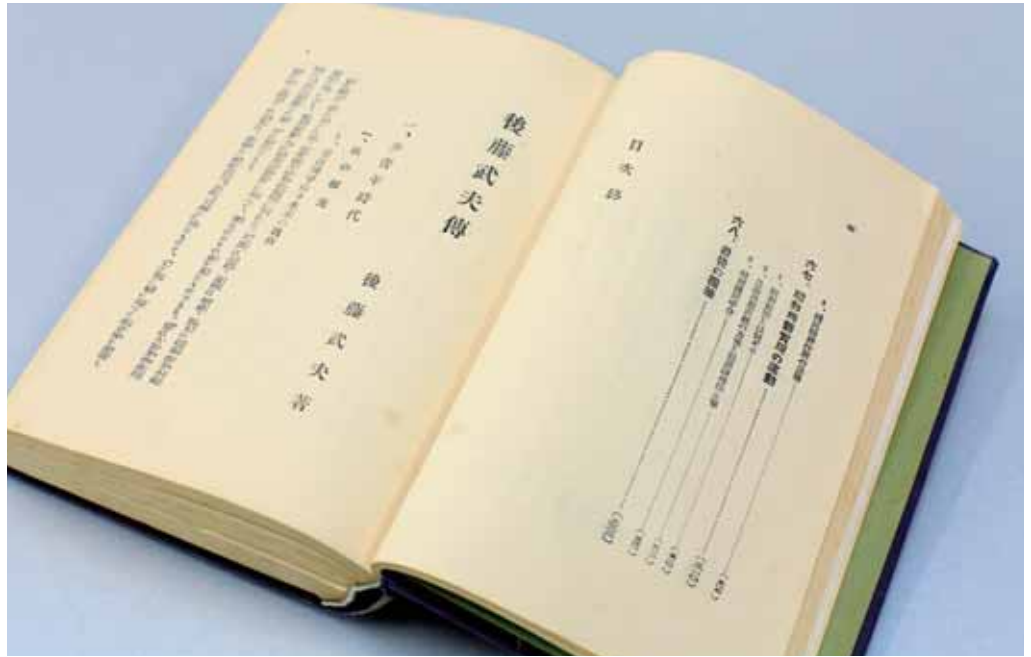
※誌面の都合で取り上げられなかった部分については近日中に当館ホームページに掲載する予定です。

書名：『後藤武夫伝』

著者：後藤武夫

発行年：1928(昭和3)年

発行元：日本魂社



学芸員ファイル

FILE No.008

企業信用調査の心を今に伝える 後藤武夫伝

帝国データバンクの創業者後藤武夫は、自叙伝を残している。タイトルはそのものずばり『後藤武夫伝』（以下『武夫伝』と略す）。536ページにもなる大冊である。室町時代までさかのぼって自らの祖先についてから述べ、時代を追って詳細に筆が進められている。

雑誌『日本魂』誌上で
6年にわたって連載

『武夫伝』はそもそも雑誌『日本魂』に連載されたものを単行本として取りまとめたものである。『日本魂』とは、武夫が忠義忠孝など日本の伝統的な道徳や思想を広めるために設立した組織である日本魂社が編集発行する月刊誌で、1916(大正5)年に創刊された。寄稿者は、時の総理大臣から学者、官僚、文学者、俳優など幅広い分野にわたり、その数は延べ5千人以上に及んだ。武夫は、毎号巻頭言を書き、政治、経済、社会などさまざまな分野について自らの主張を展開していった。

その『日本魂』に22年6月号から28(昭和3)年6月号までの6年間、66回にわたって連載されたのがこの『武夫伝』である。連載終了後間もない28年8月には早くも一冊の単行本としてまとめられ、日本魂社から発行された。定価は1円80銭。白米10kgが2円30銭で買えた時代である。出版界では文学全集を1冊

1円で販売するいわゆる「円本」がブームを迎えていた。

発刊は連載終了間もない28年8月4日。発行部数については分かっていないが、8月中旬に2版、3版と版を重ね、最終的に同年11月に5版を重ねるに至っていることから、相応の売れ行きを示したと思われる。当館ではこのうち4版を除く各版を合計6冊所蔵しており、うち1冊は常設展示室のプロローグゾーンに展示している。

読者層についても詳細は判明しないものの、『日本魂』28年10月号には、『武夫伝』を贈呈した人々からの礼状が掲載されている。その顔触れを見ると、軍関係者、弁護士、学者、会社員など多彩であった。また、当時の社内報『脱俗』誌上では再三にわたって『武夫伝』の販売に尽力するよう社員に指示していることから、読者は当社のユーザーや『日本魂』の定期購読者が中心であったと思われる。

◆ ◆
自らの主張を広めるために設立した組織が発行する雑誌に自伝を連載するというのは、ある意味で究極の自己宣伝であるが、それを臆面もなく、しかも自らの失敗も含め正直に書いているところは、後藤武夫という人物の特質をよく表していると思われる。

実際、そうした指摘を読者から受けている。『日本魂』23年1月号には読者からの次のよう



◁口絵に掲載された妻タマとの写真の原版

当館で所蔵しているアルバムに貼られている一枚。妻のほか両親、兄弟との写真や、帝国興信所本社屋の写真などが口絵に掲載されている



△『後藤武夫伝』の題字活字

雑誌『日本魂』をはじめ、日本魂社発行の雑誌・書籍は日本魂社内で印刷されていた。奥付には「印刷所 東京市京橋区櫻橋南側 日本魂社印刷所」と明記されている

な投書が寄せられた。「(前略)自己の発行する雑誌に伝記を掲げ自家広告を取てするに至っては武士道と相反する行為にして努力誌上大なる汚点を印しつあり」(注…投書文中で「努力誌上」とあるのは、当時一時的に誌名を『努力』としていたためである)。要するに武夫が武士道を主張しているにもかかわらず、それに反すること(自伝を連載すること)をやっているのは雑誌の品格を損なうものであるから、即刻連載を中止すべきだということである。

それに対し武夫は、社内的には編集部の要請によつて、対外的には青少年の参考に資するため、決して売名行為ではないと答えている。こうしたこともあつてか、単行本として出版する際に武夫は、6ページにわたつて記した序文の中で次のように述べている。

「吾を知る者は吾である。私の自伝は私以外に何びとも之を能くし得べきでない。(中略)私は私の自叙史を公にすると共に、高らかに叫んで世の青壯年諸子に告げたいと思ふのである。それは私の過去に於ける失敗が、往々にして青年の辿り易き経路であり、又陥り易き誘惑であるからである。(中略)私の伝記が、前半悉く失敗の歴史であり、後半至誠努力の実行である点に於て、聊か後進を裨益する所あるを信ずるのである」

このように『武夫伝』は、自身の生涯を詳細に、

ありのままに描いている。特に前半部の帝国興信所創業に至るまでの過程は、まさに「波瀾万丈」という言葉がぴったり当てはまり、そのまま小説にでもなりそうなほどである。

自伝で語られた、 後藤武夫の半生とは

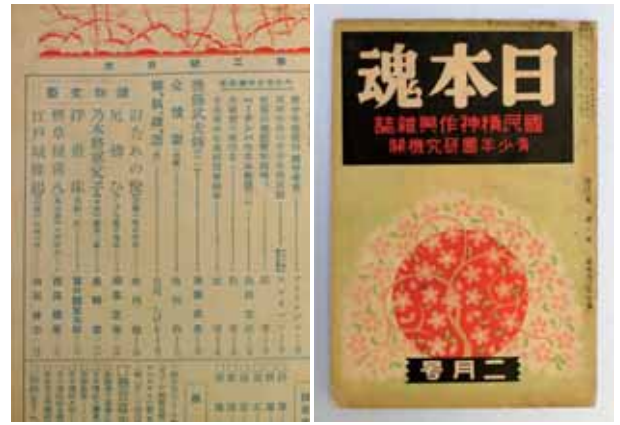
1870(明治3)年生まれの後藤武夫は、現在の福岡県久留米市に生まれ、その後筑前国那珂郡五十川村(現福岡市南区)に移り住んだ。父親は久留米藩の武士であったが、廃藩置県後は五十川村で農業を営んでおり、家は決して裕福ではなかった。長男であった武夫は父親から家業を継ぐことを期待されていたが、二農家として地方にとどまりたくはなかった。東京に行き、大学で勉強してみたいという気持ちで膨らんでゆく。そして17歳を迎えた87年によく念願の上京を果たすが、ここから「ドン底生活に落ち」てゆく。

悪友に誘われ、酒を覚え、果ては遊郭通いに耽り、仕送りを使いこんでしまう。結局仕送りを絶たれ、1年足らずでやむなく帰郷。熊本の高等学校を受験するも不合格となり、このままでは郷里に帰れないと考えた武夫は、大阪に向かい、学校に通う準備を進めるが、またしても横道に逸れることとなる。その年は大日本帝国憲法発布の前年で政治熱が高まっていたが、武夫もこの熱にうかされ、「政客気取りで壮士の



△『日本魂』に掲載された「後藤武夫伝」
左:『日本魂』1928年6月号、右:『努力』1923年5月号

ひとつの連載に付けられたタイトルが、単行本『後藤武夫伝』ではそのまま目次となっている



△『日本魂』表紙および
目次(1928年2月号)

『後藤武夫伝』連載されていた雑誌『日本魂』。連載61回目の号である

仲間入り」をする。ここから身を持ち崩し、「辻占売、演説屋、料理屋小僧、車夫、吉原奉公、露店商人、看守、呉服屋番頭」と職を転々とする。転機は徴兵検査であった。当時20歳に達した男子には徴兵検査を受けることが義務付けられていたのである。帰郷後、武夫は親不孝を反省し、父親の命に従い、地元の小学校で教員となり、結婚し所帯を持った。それまでとは打って変わって、教員として地元を下ろしたのである。

しかし、教員になって4年が経過した頃、日清戦争が起った。武夫は戦争の報に接し、「死ぬる覚悟でやりさへすれば何事でも出来る」ただこれだけが私の確信であり、私をして奮起せしめた動機であった。むしろ戦死する気で今一度奮発して見たい(略)と、最初の志を貫きたい気持ちに駆られ、関西法律学校(現関西大学)への進学を決意する。家族を帯同し、刑務所や商店で働きながら勉学に励み、3年後に無事卒業。父親の紹介で福岡日日新聞社(現西日本新聞社)に就職する。その後小倉支局長を務めるが、武夫は一地方の支局長という立場に満足できなかった。東京に出て一旗揚げたいという気持ちを抑えられず、ついに上京を決意する。1899(明治32)年のことであった。上京後、まず勤めたのが法律事務所であるが間もなく興信所に転職をする。きっかけは、関西法律学校時代に商店に勤務していた際に、商業興信所(日本で最初の信用調査

機関)の調査員が来訪し、応対した経験があり興味を持っていたからである。しかし入社した興信所はいわゆる悪徳興信所であった。武夫は、ついに自ら興信所を立ち上げる。「立派な看板を掲げながら(略)各種の罪悪を稼ぐものもある。さうした偽りの多い世界に対して、正義を叫び、公正を標榜することは勿論至難には相違ない(略)。今後断じて人に頼るまいと決心し(略)商業興信所を出て、独力で帝国興信所を創立したのは、忘れもせぬ今を去る二十有九年前、明治三十三年三月三日のことである」。

こうして、帝国興信所が創業を迎える。『武夫伝』では、創業後、自らの信念である「至誠努力主義」を貫き、どのように事業を拡大、発展させていったかが、さまざまなエピソードを交えて書かれている。序文に記されているとおり、武夫は、この自伝を通じて若い人々に対し「徹底的に努力すれば必ずや報われる」ということを伝えたかったのであろう。

◇ ◇

帝国データバンクの創業者後藤武夫が『武夫伝』を著したことで、彼の生い立ちや、創業の経緯など当社の歴史を知る上での重要事項が記録として現在まで残されたのである。その点から鑑みると、この『武夫伝』は当社の歴史のみならず、興信業の発展過程を考察する上で最重要史料のひとつといえるのではないだろうか。

一枚の写真から

大阪支社の再スタート — 1963年大阪支社新築成 —

帝国興信所大阪支所は1906(明治39)年、横浜に次ぐ2番目の事業所として開設された。大正時代に大阪本部と改称し、関東大震災で東京の本社が機能を失った時には代わりに本社機能を果たすなど西日本の拠点となっていた。

42(昭和17)年5月の企業整備令に基づいた企業合同で、帝国興信所大阪本部は東京商業興信所(現東商インクワイアリー)大阪支所と合体し、大阪合同興信所を設立した。他の多くの企業と同様に戦争や時代に翻弄されたのである。社屋は旧大阪本部の建物を引き続き使

用した。別法人ではあったが、帝国興信所としては「事業所」として扱っていた。

大阪合同興信所設立から20年経った62年、ようやく分離に向けて動き出した。翌年10月頃の正式分離を目標に、大阪支社再開設の準備が始まったのである。分離とともに事務所や建物も使用できなくなるため新社屋の建設も決定、藤田組(現フジタ)により、建設が進められた。

63年10月1日、大阪合同興信所から分離し、帝国興信所大阪支社が開設した。そして大阪市西区江戸堀の旧大阪本部跡地に支社が完成。10月3日に新

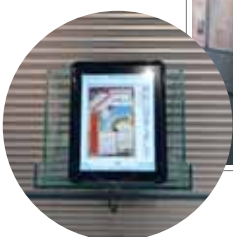
築落成記念パーティが盛大に開催された。写真はその時のものである。当日は午前10時から落成開所式を挙行、11時から大口会員と報道関係者その他を招いて落成開所披露のパーティを催し、午後3時に閉会。来会者は200名にのぼった。

完成した社屋は鉄筋コンクリート4階建て。1階は総務・経理部門、2階は調査部、3階は文書部、4階は支社長室として使われた。このビルは数度の増改築を経て、2004年10月、大阪市西区鞠本町に新築移転。西日本の拠点として、本社を補佐する機能を果たしている。



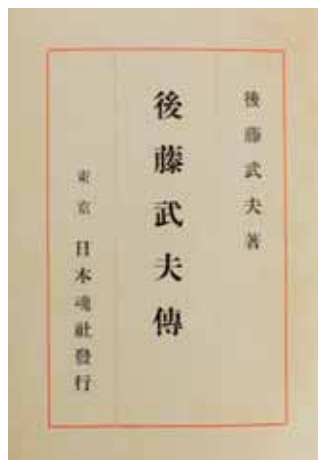
史料館TOPICS

常設展 テーマ展示 「読む、書く、伝える くずし字に見る近代日本の夜明け」開催報告



2012年4月24日(火)〜6月29日(金)、当館常設展示

室にて、テーマ展示「読む、書く、伝える くずし字に見る近代日本の夜明け」を開催しました。近世から近代にかけて残された文書史料のパネル展示のほか、タブレット型端末を使ったデジタル展示では「展示史料集」「錦絵に見るくずし字」「私家版くずし字検定」「インタビュークずし字が伝えることーその価値と学ぶ意義ー」の4つのコンテンツを展開しました。さらに会期中、関連講演会として本誌にも掲載した「史料を見る、読む、識る」くずし字が語る「社会・生活・風俗」を開催しました。くずし字に初めて触れる方、くずし字を学ばれている方など、大勢の方にご来館いただきました。



ご利用案内

[入館料] 無 料 [開館時間] 10:00～16:30(入館は16:00まで)
[休館日] 土・日・月曜日および祝日、年末年始(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

交通のご案内

[JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅から徒歩8分/中央線 四ツ谷駅四ツ谷口から徒歩9分
[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分/
都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分/丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介します。

<http://www.tdb-muse.jp/>

 帝国データバンク史料館

〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8 TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越し下さい。